

ドイツの軍事的特性

矢野義昭

ドイツは好戦的で侵略的な国のようにとられがちである。しかし、近代以前は小さな領邦国が乱立する統合の緩やかな連邦国家であり、周辺大国の干渉を受けて戦乱が続き、侵略の被害を最も受けてきた国であった。それが、十九世紀以降急激に国家統合が進み、周辺国を脅かす大国になったため侵略国のイメージがつきまとうことになった。

ドイツが周辺国の干渉を受けてきた大きな理由は、その地政的な位置によるところが大きい。欧州の中央に位置し、アルプスの北麓から北部ドイツ平原の間の段状の緩やかな傾斜地に国が位置している。面積は日本とほぼ同じ三五万七千平方キロ、三千六百キロの国境沿いに十カ国と国境を接している。このため周囲からの脅威に絶えず曝されてきた。特に北部ドイツの東西正面には河川以外に障害物がなく、マジヤール人、ポーランド、フランスなどの侵攻に悩まされてきた。なお人口は、欧州最大の八千二百四十万人に上る。

十世紀、オットー大帝がイタリアを併合し神聖ローマ帝国が成立したが、歴代の皇帝はイタリア支配に力を入れ領内の統治を疎かにしたため、中世を通じドイツ領内は自立的な領邦国家の分立状態が続いた。十六世紀には宗教改革が起り、三十年戦争によりドイツ全土は荒廃し、人口が半減した。その結果ドイツの統合は遅れフランスなどの干渉を誘うことになった。ナポレオンは形骸化した神聖ローマ帝国を滅ぼし、十九世紀にはプロイセンとオーストリアの間でドイツ統一の主導権争いが生じた。

それに決着を付けたのが一八六六年の普墺戦争である。プロシアは全ドイツ連邦を敵に回し戦ったが、モルトケが育てたドイツ参謀本部の統一指導下で鉄道を使い迅速な戦略機動を行い、優れた火力装備と相まって、ケーニヒスグレーツでオーストリア軍に大勝した。しかしビスマルクは寛大な条件で速やかに講和を結び、フランスの干渉を排した。続く一八七〇年の普仏戦争では南ドイツ連邦諸国もプロイセンのモルトケの指揮に入り全力で戦い、セダンでナポレオン三世を包囲降伏させた。セダンの戦いでは、後装銃と機関銃を備えたドイツ軍にフランス軍は無謀な攻撃を反復し大量の損害を出している。翌年一月、ドイツ帝国が成立したが、その功績は、巧みな外交を展開したビスマルクと参謀本部を育成しプロシア軍を精鋭部隊に仕上げたモルトケという、政軍の両輪を支えた逸材によるところが大きい。

その後のドイツ帝国は対外強硬策に傾き、孤立を深める。八八年に即位したヴィルヘルム二世はビスマルクを排して「世界政策」を展開し、陸海軍を増強し英仏露と衝突した。一九一四年遂に第一次世界大戦が勃発、ドイツ軍は東部戦線のタンネンベルクの戦いでは、ロシア軍の鈍重さと連携の悪さを突き、鉄道の輸送力、電信による情報指揮連絡の優越を利用して一個軍を包囲し大きな打撃を与えた。しかし緒戦で東部戦線に兵力を転用したため、西部戦線では戦略包囲を目指したシュリーフェン計画が破綻し、戦線は膠着化した。

これを破るため戦車、航空機などの新兵器が登場したものの、戦争ほどの国も予想しなかった長期消耗戦となり、戦死者数は一千万人に達した。このような誤算が生じた原因は、産

業革命の結果もたらされた飛躍的な武器の性能と生産力の向上を過小評価したことにあった。双方ともに近代火力の壁に生身の兵士を大量に反復攻撃させ、かつてない大量損耗を生むという愚を繰り返している。

ドイツの敗北を決定付けたのは米国の参戦と国内経済の破綻による革命の勃発であった。ドイツは敗戦後巨額の賠償金を課せられ超インフレに苦しむが二四年ころからは経済は回復しつつあった。しかし二九年の世界恐慌はドイツ経済を直撃し、再び超緊縮政策を強いられた。その結果六百万人の失業者が溢れ、政治は左右両極に分裂し大衆の支持を得たナチスが台頭した。

ナチスは大規模な公共事業と軍備拡大により失業者を一掃したが、対外強硬政策に乗り出し、ポーランドに侵入、第二次世界大戦が勃発した。ドイツ軍は緒戦では、機甲部隊とそれに連携した対地攻撃機による電撃作戦により瞬く間に全欧州を席卷した。しかし独ソ開戦以降はロシアの広大さと寒冷に阻まれて戦力を消耗し、四三年一月のスターリングラードの戦いで敗れて以降は形勢が逆転し、四五年五月降伏した。敗因の一つとして、ヒットラーが作戦の細部にまでしばしば干渉したことが上げられる。そのため非合理的な作戦が強行され、ドイツの敗北を早めた。

第二次大戦後は冷戦の谷間でドイツは東西に分裂し、西独は NATO、東独はワルシャワ条約機構に加盟し、三十年余にわたり対峙状況が続いた。西ドイツは、占領下での憲法制定と教育制度の改変を拒絶し「ドイツ連邦共和国基本法」を制定した。なおドイツ基本法は両院で三分の二の賛成が必要とされているが、四十回以上改正されている。また戦争とユダヤ人虐殺などの非人道的行為はナチスの犯した罪とし、ドイツ国家として責任追及されるのを回避している。

ゴルバチョフが八九年七月、「いかなる社会主義国にも独自の道を歩む権利がある」と表明し、冷戦崩壊は一気に進んだ。同年九月ハンガリーがオーストリアとの国境を開放したため、東独市民が万単位で西独に亡命する事態が生じた。その結果遂に東西国境が開かれ、九〇年十月一気にドイツ再統一が果された。再統一後は NATO の役割も変わり、在独米軍は二〇〇六年現在、六万四千人に削減され、ドイツ軍もコソボ、アフガンなど NATO 域外に派兵されるようになった。

ドイツ連邦軍の兵力は『ミリバラ二〇〇七』によれば、正規軍総兵力二十四万六千人、予備役十六万二千人であり、一般徴兵制を採用し、男子のみ九カ月の兵役義務が課せられている。良心的兵役拒否は認められているが、その場合は非軍事的任務に就かねばならない。国防費は三百五十七億ドルである。陸軍は十六万一千人、レオパルド II など戦車約二千両、火砲約千四百門、海軍は二万四千人、潜水艦十三隻、主要水上艦艇十六隻、空軍六万一千人、トーネイドなど主力戦闘機約三百機、輸送機約百機などを擁している。

ドイツ国防白書によれば、連邦軍の中心任務は引き続き伝統的意味における自国防衛および集団防衛であるが、新たな脅威が増大しており、紛争予防及び危機管理が最も生起する公算が高い任務であるとしている。このため、戦略輸送力、世界規模での偵察能力、効率的で

相互運用性の高い指揮能力などの強化に資源を重点配分するとしている。

再統一後も東西の格差は残り、旧東独では今も失業率が高い。しかしドイツは NATO の東方拡大、EU の成長に伴い確実に政治面、経済面での影響力を拡大しており、国際貢献の面でも活動範囲を広げている。また武器輸出は、主として NATO 向けではあるが、米露仏に続く輸出国である。日本と同じ敗戦国ではあるが、その再生への歩みはドイツ風の質実さをもって、着実に進められており、日本の未だ至らない点を気づかされることの多い国である。